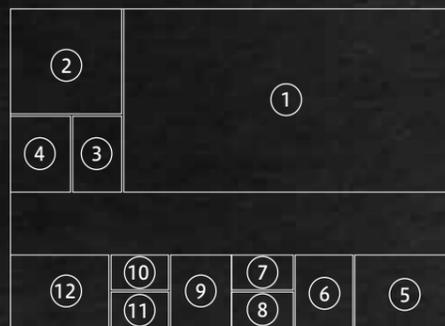




令和2年
子泣きの相撲



1_どちらも泣いて、引き分けに/2_朝から受付には長蛇の列が/3_三世代で参加した親子/4_長年行司を務めた亀山富士郎さんが今年で引退/5_泣かずに堂々としている子も/6_おじいちゃんの肩車で観戦/7_寝てしまう子や海外から参加の子も/8_雄姿を撮ろうと多くのカメラマンが駆け付けた/9_りっぱな化粧まわしの赤ちゃん/10_多くの見物客や家族にぎわう会場/11_無料でぜんざいも振る舞われた/12_赤ちゃんの泣き声が会場に響く



泣き声にも家族は大喜び。赤ちゃんたちの熱戦を逃すまいと、シャッターチャンスをうかがう家族やカメラマンの姿も見られました。また、無料でぜんざいなども振る舞われ、参加者や応援に駆けつけた皆さんの冷えた体を温めました。

2月3日、節分の日に最教寺奥の院で「令和2年子泣き相撲」が開催されました。先に泣いたほうが勝ちという珍しい行事に、市内はもとより県内外から1歳前後の赤ちゃん約200人が参加し、熱い戦いが繰り広げられました。三重塔の前に特別に設置された土俵に、鉢巻を締め、法被と化粧まわしに身を包んだ赤ちゃんが向かい合います。行司の「泣いたが勝ちよ、はつけよい」の合図で取組が始まり、すぐに泣き始める赤ちゃんや、行司を不思議そうに見つめて一向に泣かない赤ちゃんなど、さまざまな表情を見せる赤ちゃんに会場は笑いや歓声に包まれました。この日はやはり、赤ちゃんの大きな

